



弘前市では古い煉瓦倉庫をリノベーションした弘前れんが倉庫美術館が、2020年4月に開館を迎えます。開館準備室スタッフの小杉さんと大澤さんに、開館の経緯、コンセプト、地域との関係性について、お話を聞きしました。

歴史ある場所を残したいという市民の声から美術館構想が生まれたこと。

開館前から地域の方を交えたオープンな形で美術館について考える場が設けられていること。

アーティストが地域の歴史や文化に向き合うことから生まれた作品を収蔵していくこと。

地域のクリエイティブ・ハブ（文化創造の拠点）となること。

徹底的に地域に開かれた美術館の姿であり、すでに地域から愛されている様子がお話から伝わってきました。

開館後の動きにもぜひ注目したい、弘前れんが倉庫美術館でした。

日時：2019年10月30日 10:00~16:00  
リサーチ先：弘前れんが倉庫美術館開館準備室  
お話を聞きした人：小杉在良氏（弘前れんが倉庫美術館開館準備室スタッフ）  
大澤美菜氏（同上）

調査者：佐藤李青（公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京プログラムオフィサー／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）  
小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

小杉在良  
どこまでお伝えできるかはわからない部分もあるんですけど、尋ねていただけたことにはお答えしたいと思います。

小林めぐみ  
ありがとうございます。

小杉  
私はこの準備室に直接関わったのは今月からなので、まだ30日。大澤はもともと東京で、2年前から。大澤は地元祭りのにもでまくっています(笑)。

小林  
大事ですよ、祭りに出るのは。

大澤美菜  
飲み屋に行く、もう声をかけられるようになって(笑)。

小杉  
小杉さんは別の所からいらっしやったのですか。

小杉  
はい、弘前に来て20年近くになるんですが、NPO法人Harappaというところがありまして、こちらの事務局を9月までやっていました。いまも理事という立場で関わっています。Harappaと弘前れんが倉庫美術館の取り組みは、自分の中では一緒の流れでもあるんです。

小林  
今おっしゃるような思ったのが、以前、奈良美智さんと色々な企画をされていたのを見聞きしてはいたんですが、それが美術館を立ち上げることに前進していったことがすごいなと思っていました。市民側からの声と行政の動きがどのように関わり合い重なり合って実現に結びついていったのか、ぜひ可能な範囲で教えていただけたらと思います。あと、歴史がある場所を残して活用していこうと思われたいあたりも教えてください。

煉瓦倉庫

小杉  
まず、この煉瓦倉庫ですが、だいたい明治・大正にできたもので、約100年ぐらい前の建物なんです。最初は日本酒をつくっていたところでした。福島藤助さんという実業家・醸造家がいまして、1年を通してお酒をつくりたいということ、この場所に煉瓦倉庫を建てたという経緯がありました。

小杉  
そこで一つ大きいのが、木造のほうが安上がりだという反対に対して、福島さんは「この事業は自分のためにやるんじゃない、弘前市のためにやるんだ」とおっしゃったことです。仮に自分たちの事業が失敗したら、木造だったらすぐに壊されてしまう。そうじゃなくて、建物が財産として後世の人たちに残るように、煉瓦造りにするんだという話をされていて、実際にそのあと、福島さんの日本酒造りは福島さんの手を離れてしまったりするんですけども、そのおかげで、いまこうやって100年後に美術館になろうとしています。

小林  
かなり大きいんですね。

小杉  
そうですね。その後、戦後にその事業を引き継いだ吉井勇さん(吉井酒造株式会社の創業者)という方が、弘前の林檎の価値をもっと高めたい、そのためにはどうしたらいいかということ、ヨーロッパに渡って、シードルと出会って、じゃあ、ここをシードル工場にしようということになって。日本で初めて大々的にシードルが生産された場所となっていました。そのあと、ニッカウヰスキーにシードルの製造は移って、昭和のなかごろにこの場所から撤退しました。そのあとこの煉瓦倉庫は表立って使われることはなかったんですね。

小林  
ずっと空いてたんですか。

市民活動として始まる

小杉  
はい。ただ、空いていたとはいえ、吉井酒造さんのほうでは、ここをちゃんとメンテナンスをしながら建物としての魅力というものを維持して、残していました。そのような中で、1980年代ぐらいから、弘前大学の先生を中心にあそびを美術館にしたらいんじゃないかっていう動きが市民活動として始まるんですね。一時期、弘前市が取得をしようとしたり、色々あったんですけども、90年代の後半に一度断念するんですね。

小杉  
そのあとに、吉井酒造のオーナーがたまたま本屋さんで見た奈良美智さんの絵を見て、この作品をあ倉庫に飾りたい。

小林  
そこからだったんですか。

小杉  
そこから動き始めて、2002年にこの煉瓦倉庫を使った美術館が開催されました。奈良さん本人や、ギャラリイも強く関わってくれましたし、ちょうどその頃に青森県立美術館の準備が進んでいる中で、その学芸の方も個人的にも関わり、中心となって動き、そして多くの弘前の市民の方が携わって、この展覧会が実現しました。

小林  
展示以降も、みなさんとの体制は継続しているんですか。

文化のために使おう

小杉  
2002年には本場に色々なメンバーが集った。お花屋さん、酒屋さん、カメラマン、弁護士、大学の先生。僕も当時は学生として関わっていました。市民による実行委員会形式だったんですが、もしも仮に余剰金が出た場合は弘前市の文化のために使おうということを取り決めていました。実際に出るとは思わなかった余剰金が出て、それを元につくられたのが、NPO法人Harappaという団体です。

小林

それが15年、16年続いているってすごいことですね。

小杉 奈良さんの展覧会を 2005年、2006年と計3回行いました。その後は、弘前市の市民ギャラリーの管理運営や、定期的な映画の上映会、子ども向けのワークショップとか、そういった様々なことをやっている団体です。

Haradaは積極的に煉瓦倉庫を美術館にしようという団体ではなかったんですが、そのあとに地元で美術作家さんの団体などから、やはりここを美術館にしようという気運が高まって、2015年に弘前市が倉庫を取得して美術館にすることが決まりました。

### 明治からの歴史

小杉 すこい、明治からの歴史が。どうして Haradaさんは、積極的にここを美術館にしようとは思っていなかったんですか。

小杉 単発でイベントはしていましたが、恒久的に美術館にしようというのはいくらもハードルが高くて。予算的にも難しいし、希望はあるけれど、じゃあ、現実問題できるかと言ったら、そこまでの動きはなかったです。やはり100年前の建物ですから、いろいろな部分で継続して使うことは、なかなか民間のレベルでは難しいところもありました。

小杉 弘前市の所有にしようというきっかけって何だったのでしょうか。

大澤 80年代ぐらいから市民の声があつて。奈良さんの展覧会だけではなくて、りんごやシードルに関わるイベントとか、そういった活用ができないかという話が市民からあつたのではないかと思います。

### 『A to Z Memorial Dog』

小杉 3回目の奈良さんの展覧会が終わったあとに、弘前市は奈良さんの出身地でありながら市内には奈良さんの作品がなかったことで、じゃあ、その収益金で作品をつくってもらおうということになって。煉瓦倉庫の前に、『A to Z Memorial Dog』という奈良さんの作品を日常的に展示しようということになりまして、実行委員会で奈良さんに制作を依頼して、市に寄贈するという流れになりました。

煉瓦倉庫は当時は私有地でしたが、手前は弘前市の公園になっていました。そこに奈良さんの作品を設置させてもらったことで、一つの観光スポットにもなりましたし、弘前市民にとつて愛される場所になったので、美術館の動きに拍車をかけた。

大澤 「犬の公園」って呼ばれるようになったり。

小杉 そうですね、デートスポットになったり、プロポーズ場所になったりする。

小杉 弘前の人にとっては、もう大事な場所になっていたんですね。

### 「光と音のサーカス」

小杉 それが開館までの流れですね。開館が決まってきた動きは、市役所のウェブサイトをみていただくとかわかります。われわれが行ってきたイベントや、どういったスケジュールで動いているかを見ていただけます。

市が煉瓦倉庫を取得した翌年かな、美術館開館前のプレイベントとして、Harada企画で「光と音のサーカス」というパフォーマンスアートのイベントを行いました。CINEMA dub MONKSというグループに、煉瓦倉庫の改修に入る前に、ここでパフォーマンスをしようという

取り組みをしました。なおかつ、煉瓦倉庫の建物そのものを見ていただく見学会も併せて行ったりもしていましたね。

小杉 煉瓦倉庫は、市民の人にとって思い入れのある場所でもあるけれど、そうでない人も多いのですか。

### 何だろうと想っていた

小杉 そうですね。あくまで私有の施設、私有地だったので。黒い塀に囲まれていたんですね。建物はあるけれど、この大きい煉瓦の建物は何だろうという人が、実際は多かったと思います。2002年に行つた奈良さんの展覧会も、もちろん奈良さんの作品も素敵だったんですけど、市民の人の多くの関心は「あそこに入れる」っていうのが、一つ大きい要因だったのかなと思いますね。

小杉 奈良さん自身も、子どもときに見ていたけれど何だろうと思っていたとか(笑)。

大澤 そうか、わからないだけに興味があつたりもしたんですね。そうか、わからないだけに興味があつたりもしたんですね。そうか、わからないだけに興味があつたりもしたんですね。そうか、わからないだけに興味があつたりもしたんですね。

小杉 一つのピースと言いましようか、作家が訪れるときに、この場所はどういったところだったのかっていうのは、やっぱり興味があると思うので、それで実際に作品に反映させるかどうかは別として、こういう場所でしたよっていうのは紹介したり、提示したりしています。

小杉 美術館を新設される時、もともと歴史のある場所を選択されたっていうのはどうしてでしょう。

### 美術館にするのであれば、もうここしか考えられなかった

小杉 なんだったんでしょね(笑)。みなさん「新しく建てるほうが安いよね」と言います。でも美術館にするのであれば、もうここしか考えられなかった。

小杉 あの場を残したいっていう。

### 「記憶の継承」

小杉 そうですね。今回、建築設計を担当している建築家の田根剛さんは、「記憶の継承」をキーワードに上げている方です。

前段として、市が建物を取得してから実際に運営する業者が決まるまでの間に、弘前市ではヒアリングや検討委員会を開いていて、そこで、有識者と市民の方を交えて話してきました。基本的にその方針としても、あの建物をそのまま残すべきだ、なるべくあの現状を生かしたまま美術館にするのが良いという意見にまよりました。それが、コンペの募集要項とかにも反映されたんだと思います。

小杉 市から依頼された検討委員会と、市民の声を聞く場とのウエイトはどうなっていますか。

小杉 確か最初は煉瓦倉庫をどう活用していくかについて、幅広く市民の方々の声を集めるヒアリング会を数回行って、そのあとに検討委員会が実際に動き始めて、それをもとに市が募集要項をつくって、コンペという流れになっていますね。



市民の熱量

小林 場の活用について市民の熱量があったんですね。

小杉 一般市民もそうですし、いままでこういった取り組みに関わっていた人、観光協会の人、様々な人が集まって、市が音頭を取ってヒアリング会をしたと聞いています。

小林 そこにどれだけ自分の意識で足を運んでもらえるか、そこに持っているのが鍵だなと思いますね。

小杉 市民向けのヒアリングを行ったときに、たくさん意見が出過ぎたという話を聞きました(笑)。

小林 それぐらいみなさん関心があるんですね。いいな。

小杉 その間、煉瓦倉庫の前で福島藤助さんの一生を描いた舞台・演劇を市が主催してやったりしました。

大澤 去年(2018年)の2月に、初めてトークイベントを開催しました。年1回ぐらいのペースで、美術館のこういうことが決まりました、みなさんどう思いますかとか、そういった場をイベントとしてもう結構しています。

小杉 今年も2回すでに開催しました。7月には開館日と名前の発表を。今月はオープニング企画と作家の紹介っていうものをやりました。

大澤 いやいよ開館まで半年を切った段階で、具体的に美術館の

中身がどういふふうになるのかを、お伝えする時期になってきたっていうこと。

小林 美術館のコンセプトやミッションはどういうふうにつくっていかれたんですか。

アーティストに実際に弘前に来てもらって

大澤 もともとは市の美術館なので、市が定めている基準に基づいて私たち運営をする側の会社がその方針に合わせてミッションをつくりました。

この美術館の特徴になるのが、美術品を借りてきて展示するという形ではなくて、アーティストに実際に弘前に来てもらって、そこでのリサーチが制作に反映されて、それを展示して収集をしていくっていう、そういうサイクルが基本です。

小林 これから新作ばかりが、ここに集まってくるんですね。

大澤 そうなんです。コミッションワークが中心になっていく。

佐藤李青 美術館でレジデンスするんですか。

大澤 いえ、美術館の中には泊まれる施設はないので、美術館の近くか、どこかを借りて滞在する形です。あと滞在の期間も、特に定めているものではないので、何日なのか、何週間なのか、アーティストによって全然異なってくると思います。

展示会が始まってから決まってくるかもしれないですし、そこは結構フレキシブルに、作家と展示会のプログラムの内容によって考えていく感じです。

小杉 ウェブで「弘前エクステンジ」というものも紹介していま

左側の棟がカフェになるんですね。

大澤 はい。こちらにカフェとミュージアムショップとシールド工房ができる。ここが初めてシールドがつけられた場所ということもあって。

残すという決断をしたんです

小杉 建築家の田根さんの「記憶の継承」というコンセプトと、市でもできればこの煉瓦倉庫をそのまま残すようなかたちでという要望で、すごく苦労しているらしいです。例えば、奥の大きい部屋は壁がコルタールで、通常作品を掛けるのが難しい。でも、それを一部残すという決断をした。通常、煉瓦造りの建物をリノベーションする時は、外見は残し

す。「弘前出身や縁のあるアーティストと、地域の歴史や伝統文化に新たな息吹を吹き込むアーティストらを招聘し、滞在制作や調査研究、地域コミュニティとの関係性を通して行う様々なプロジェクト」と書いてあるんですが、これがレジデンスの一つの新しいかたちなのかなと思うんですね。

大澤 アーティストに限らないということも、一つ特徴としてあります。

佐藤 物理的な美術館としては、あくまでも見せる機能が空間の中心になるんですね。

公民館的な使い方

大澤 展示室が空間としては一番大きいところにはなるんですけど、スタジオなどもあります。これが模型です。低い1階建てとL字の2階建てと建物が二棟あって、L字のほうが美術館になる施設です。まず最初に入る建物に交流機能が付いています。1階に三つのスタジオとギャラリーが一つあります。これは貸し出しをする施設で、公民館的な使い方ができるようなところで。

小林 申請すればどなたでも使えるんですか。

大澤 そうです、音楽練習ができるような防音設備があるスタジオ、ダンスや小さい発表会ができる床がフローリングで大きい鏡があるスタジオ、それから3Dプリンターや木工ができる小さめのアトリエとして使えるスタジオの、三つのスタジオ。あと借りられるギャラリーもあります。2階部分はオフィスとライブラリーです。ここは自由に入れるところで、中高生が勉強してもいいスペースにしています。ライブラリーなので美術関係の図書とかカタログとかを置く予定です。

小林 基本的には現代アートの美術館ですよ。市立博物館との住み分けなどはありますか。

生きているアーティスト

大澤 はい。こちらの美術館のほうでは、やっぱり生きているアーティストの展示会が中心になります。

江川 作品をつくりながらそれを展示するという運びのときに、市民との関わりはどのようになるんでしょう。

大澤 まさにいま作品をつくる過程で、市民の方にいろいろと協力をいただいています。例えばナウイン・ラウンチャイクンさんっていう、タイのアーティストの方が、町の人にインタビューして、それで絵画作品とナレーションが付いた映像作品をつくっています。そういった市民との関わりを持ちながら、つくっていく作品もあります。

江川 それ、いいですね、市民の方たちも思い入れができて、美術館に足を運ぶ流れができますよね。

弘前市の歴史にまで広がっています



小杉 煉瓦倉庫の歴史もそうですけど、そこから派生して弘前市の歴史にまで広がっています。あらためて弘前の歴史っていうのはこうだったんだっていう、弘前の市民も気づいていないことが、作品を通して感じ取れるんじゃないかなと思いますね。

小林 既存の作品を持ってくるのではなくて、この場所をくみ取った作品を新たにづくり出していくことを主軸にすると決めたポイントはなんなんですか。

大澤 このかたちを選んだ理由は、やっぱりこの建物を残していく、後世に伝えていくというところから出発しているから。そこから新しい美術館としてできることというのを考えていった結果、そうになりました。

小林 美術館の歴史から弘前の全体の色々な情報が集ってきて、その記憶の集積と表現が集ってくるのとすると、それはもうすごいことですよ。

江川 開館3年後ぐらいまでの展示計画のイメージなどはありませんか。

小杉 開館してからある程度のスパンは大きく三つの期間に分けています。一つが春夏と秋冬で、これはいわゆる企画展をわれわれ主催でやるかたちと、冬は奥の大きいスペースを貸し館というようなかたちで、市民の皆さんはじめ、色々な方に使ってもらえるような枠組みにしようかと。

## 15年間

佐藤 運営は市の直営なんですか。

小林 友の会のようなもの、ボランティア組織というものを、一応、両輪でつくる予定になっていて、いま、それを具体的にどこのようなかたちがいいかということとを詰めている段階ですね。

昨日も、地元のいろんな業者の異業種交流会の青年部みたいなところがあって、彼らでこの美術館をどう活かせるかっていう話をするから、よかったですね。

小林 素晴らしい。プレゼンさせてくださいってこちらからお願いでするのではなく、もう勝手に考えだしている。ちゃんと市民のものになっているんですね。

大澤 弘前大学がすぐ近くにあって、そこでフランス語の先生と学生さんたちが中心になって、フランスと弘前で何かできないかと、毎年「フランスマルシェ」というお菓子やアーティストとかフランスに関わるものでイベントをしています。そこで配るフリーペーパーもつくっています。シードルがフランスから来ているということもあって、今回は美術館について田根さんにインタビューさせていただいて。田根さん自身も今フランス在住です。メールでのインタビューだったんですけど、質問から構成まで、全部学生が考えています。こういったかたちで取り上げてもらえるのも嬉しいですね。

## クリエイティブハブ

小杉 コンセプトの一つとして、美術館はクリエイティブハブを指すということをやっています。色々な人が交わって、何かそこからまた外に発信されていくというような、美術館をきっかけに創造性豊かなものが離れたところでもどんどん生まれていくような場所になればということを目指しています。

一つの例として、「光と音のサーカス」というイベントで、ここにたまたま来ていた映画監督と、ここにたまたまいた走り回っていた子どもが出会って、映画作品になりました。去年ベネチア国際映画祭で発表もされました。そもそも映

小杉 この事業は、PFI(Private Finance Initiative)という方式で取り組まれています。何度説明しても、僕自身もよくわかっていない(笑)。市の美術館ではあるけれど、立ち上げから実際に運営するまでを民間主体で市と一緒にやっていくというかたちなので、運営もわれわれがやる予定ですよ。

大澤 制度的には開館後は指定管理の指定を受けるということになります。一般的に、美術館を建てるときに、建物で済ました、指定管理者募集しますっていう流れになるんですけど、そうではなくて、開館の前の設計の段階から運営チームも入って、例えば学芸的な視点ですとか、運営的にこういう機能があったほうがいいとか対話をしながら、議論しながら美術館をつくっていきけるという、そういうかたちになりました。

佐藤 指定管理期間は、どれくらいなんですか。

大澤 15年間です。

小林 それはいいですね、15年あれば。

大澤 そうなんです。やっぱり5年とかだと長期的な計画が難しくなってしまうので、安定的にプランを立てることができそうです。美術館でPFI事業って、おそろく弘前が全国初。

小杉 先ほどの補足になりますが、開館前にPFI事業の一環で煉瓦倉庫の歴史を市民のみなさんと一緒に調べるという取り組みをしていました。

小林 部活にしましたね。

画監督が弘前で映画を撮りたいと言って、いい子どもいなかと思ってたままこのイベントに来たら、走り回っている子どももいて、「映画に興味ない？」って言って誘って、ベネチアまで行ってしまったっていうようなこともあったりしたんです。

小林 そういうふうには、自然発生的にいろんな動きが生まれてくるポイントってなんだと思いますか。

## 祭りのネットワーク

小杉 個人的な感想ではありますが、一つには、地元の弘前の人々の気質というものもあると思います。99年にトヨタのアートマネージメントが青森市で開かれて、県内で2000年以降にアートプロジェクトをやるうと思っていた人たちが集まって色々なディスカッションが開催されたんです。そのなかの一つのまとまった意見として、青森には祭りがあると。祭りのネットワークというか、考え方、気質というのは、そういうものにつながっていくんじゃないかと。

世代も職種も関係なく、わいわいみんなで集まって、火がついたらもう盛り上がりたててしまふみたいなところがあります。全部お膳立てしてやりませんかっていったら、たぶんそうならないんじゃないかなと思っ。

江川 この前、二本松でライブミュージアムネットワークのイベントをしたんですけど、その振り返りの時のキーワードがやっぱり祭りだったんです。

小杉 そうだ。提灯祭りですね。

江川 提灯祭りは10月だけど、1年間通じて準備に費やして地域で集まる。祭りの打ち合わせだといっては男の人は出て行って打ち合わせする。じゃあ、女性はどうするかというたら、どんな食べ物を出すか、子どもたちはどうするかと、

## 色々なものに飛び火をいって

小杉 部活にして、リサーチをして、ヒアリングをして、最終的に成果展を行いました。煉瓦倉庫の歴史を調べていたら、色々なものに飛び火をいって、じゃあ、これを雑誌風にまとめようということとで、一つの雑誌をつくることをコンセプトに活動しています。例えば架空ですが、福島さんにインタビュー形式で歴史を語ってもらったりとか、まち歩きマップがあったりとか、お勧めコーナーとか。そういう活動を市民のみなさんと立ち上げていったのがありまして、この市民活動の取り組みを美術館開館後も一緒に何かできればという話を、ちょうど始めようというところですよ。

市の方には大変申し訳なかったんですけど、ざっくりとした企画書しか出していなくて。何をするかはみなさんと一緒に決めますって言ったので、何するかはわかりません(笑)。市民のみなさんと、煉瓦倉庫について調べることことまでは決めます。ただそこから先は、市民のみなさんと決めますっていう形式です。雑誌形式にまとめて展示にすることも全部みなさんと一緒に決めたいというようなかたちですね。

小林 関わっている年代はいろいろですか。

小杉 そうです、このときは、20代から、60、70代ぐらいまでだったですね。

江川 今後運営にあたって、ボランティアや友の会的なものもあるんでしょうか。

## 美術館をどう活かせるかっていう話をやるから、よかったですね。

小杉

これもまた打ち合わせするということに、常に祭りに対しての意欲があって同じ地区に住んでいるというだけで団結力があるんです。

今回、私たちのイベントも、その方々にほんって投げただけなんですけど、ばばばっていろんなネットワークを使って、「やぐやく」というお料理をつくってくださって、そこにちゃんと物語をつくってくれて。「大変だったでしょ」って言うても、「いやいや、もう常にそういうことはやってるから」っていう、それが結局祭りだったんです。

小林 祭りが生きているところは、そういうことがあり得るということですね。

江川 地域のコミュニティがすごく残っているんですね。世代の縦の流れもあって。

## きっかけが欲しかった

大澤 何かきっかけが欲しかったというのもあるのかなって思いました。この間、畠山直哉さんの写真の撮影に同行して近くのホテルの屋上に上がらせてもらったんですが、ホテルの副支配人の方が、お忙しいのにずっと付き合ってくれて、「うちはいつも仕事がルーティンだから、こういうことがあるとちょっと楽しい」と言ってくれました。実は何かやりたいこととか、思い描いていることとか、それぞれ個人では持っているんだけど、きっかけがないとなかなか出てこなかったものとかが、もしかしたらあるのかなって感じました。

小林 美術館の役割として、お膳立てすることではなく、ハブという在り方としては、どういうところが理想的だと思いますか。

## たぶんこれと決めてしまっただめ

小杉 それはいま探っている最中だと思うんですけど、たぶんこれと決めてしまおうとだめなのかとは思ってはいますね。いろいろな団体とお話しする機会がありますが、それぞれで意見が違う。こう使いたいという人がいれば、全然違う方向から使いたいという人がいたりする。なので、冬期間に市民の方に使ってもらうことに対して、いまルールをつくってしまうんじゃないかと、そのケースによって話し合っているか、どこまでできないか、ケースに応じてやっていくしかないんじゃないかということは、学芸の方とも話しています。

小林 公のところだと断るルールづくりとか、制度設計してからじゃないと動かなかつたりするじゃないですか。そこがそうじゃなくあり得るといえるのは、うらやましいぐらいです。大澤 やはり行政は行政としてやらなければいけないルールがあるので、そこをうまくできるようにすることですね。

小林 それぞれにミッションはあるとしても美術館が展示をするためだけの場所になってしまったらもったいないと思います。こうでなきゃいけないというのはなくていい。もちろんミッションは大事なので、ミッションをどう実現するかというところで、選択肢の幅は持たほうがいいですね。

### 可変空間ってなに

小杉 もう一つのコンセプトキーワードとして、この美術館はサイトスペシフィックであることはもちろん、タイムスペシフィックというのも提案しています。いまはライブラリー、展示室、カフェ、外というふうに分けていますが、それがどんどん可変していった方がいいことをコンセプトにしています。

これからここにできる美術館も同じだと思うんですけど、色々な人に出会ったり、始まつたりしたことが美術館の成果として見えるようになる方法は、なんかないものかなと。

### 「弘前エクステンション」

小杉 いま、試みようとしているなかの「弘前エクステンション」という枠をつくるというのがあります。われわれも開館前に検討してるなかで、そういった漏れてしまうことというのは多々出てくるだろうと。それはすごくもったいないから、何かそれを受け入れる受け皿にもなればということ。「弘前エクステンション」を考えました。それはレジデンスだけではなく、例えば付随したワークショップであったり、レクチャーであったり、地元の人とトークセッションであったり、そういったものを一つの「弘前エクステンション」というプログラムですべてパッケージしてしまおうというもの。展覧会と、それに伴った「弘前エクステンション」という二つをちゃんとアーカイブできるかたちを採っていること。

規模の大きい小さいはあれどそこに優劣の差はなくて、一つのパッケージとしてやれば、残す、伝えるという部分に関してやりやすくなるんじゃないかという試みをしています。実際にそれを初年度は動かしてみようつもりです。

佐藤 つくるプロセスもアーカイブしたり收藏したりするんですか。

### アーカイブをどこまでできるか

小杉 アーカイブをどこまでできるかという問題はあります。記録とか写真とか、そういった部分ではできると思いますが、どこまでそれが細かく残せるかというのはまだ未知数です。

今度、開館記念プログラムに参加する潘逸舟さんという方がいます。中国出身の方なんですけど、お父さんの留学で弘前に来て9歳から高校生まで弘前で過ごしていて、ちょ

それが使いやすいかどうかは別として、そういった考え方で、展示室が市民ギャラリーにもなるし、市民ギャラリーが展示室にもなるし、ライブラリーはもしかしたらライブスペースになったりとか。

佐藤 スタッフの配置や構成はどうなっているんですか。

大澤 大きく学芸と運営の二つ、あと広報ですね。

小杉 でもそれは弁证的に重なっている。

あと、日本の美術館では珍しいインストーラーも常駐してもらうことになっていきます。例えば、市民がこうやりたいって言ったときに、それが技術的にできるのかどうかというのをすぐ判断できるテクニカルスタッフです。そういったところは、実際に動かしてみないとわからないというのが、もちろん正直なところはあるんですけども、そういったかたちで進めていくことができるかなと。

運営側にコンシェルジュみたいな人を配置しようという話もしています。観光客の方を町に案内したり、アーティストを案内したり。

大澤 それぞれができることとか、得意なところとかを活かしてやっていく。

小林 小中学校、高校、大学と、色々な層と関わる可能性があると思うんですけど、開館前の段階から、学校や大学との動きがあつたりするんでしょうか。

小杉 普及プログラムの学芸はまだいいのですが、アーティストの制作に弘大の学生に手伝っていただいたりしています。

うどそのタイミングで奈良さんの展覧会があつて、そもそも美術に興味のある子ではあつたんですけど展覧会が一つのきっかけとなって自分で発表したり、東京藝大に進むことになった。それが今度また来てくれる。今後もそういうこともあるかもしれない。それはあくまできっかけを与えただけで、美術館の成果ですって言うのもどうかと思いがすが。

佐藤 でも、ひとつの活動がきっかけで生まれた活動や、それが目に見えるかたちで美術館の活動に現れてくるというのは、やっぱりいいですね。そういう成果が、よりうまれやすくなるような美術館になるといいですね。

小杉 15年という運営期間をいただいているので、そういったかたちでほかの指定管理のところでは難しい長期的な目線で活動することはできるのかなと思います。

小林 この前の通りを少し歩いてきたんですけど、ずっと美術館のポスターが貼つてあつて、すごくみなさんが待っている感じというか、関わっている感じが、町から漂ってきて、うらやましいです。

江川 それぞれのお店に木でできた可愛らしい看板があつて、もともとそういうものづくりとか、盛んだったんでしょうか。

小杉 そうですね。歴史的には城下町であつたというのと、やはり東北はどこもそうだと思うんですけど、工芸、民芸が盛んで、そういったものが根付いていて、それがまた一つの誇りにもなっているというのは、弘前の一つの特徴なのかなとは思っています。これは地元のごきん刺しという刺し子の名刺ケースなんですけども、結構若い人とか、準備室スタッフもほぼ全員持つてる。

### 一つの物語として語る

大澤 教育委員会の方たちと意見交換もしています。この間は、中学校の美術の先生たちが、現場の見学にいらして、実際にどういうふうなスケールで使えるのかをご覧になったり、「子どもたちの作品展示などはできるんでしょうか」とか、そういった思いを持っていらつしやる先生方もいらつしやいます。

小杉 その点は弘前市も積極的に動いて来ています。昨日は校長会で、小中の校長先生向けに、美術館のよう活用に活用できますよということ、市から各校長先生にお話しいただきました。

佐藤 美術館が地域のハブとして機能していくこと、そこからエコシステムが生まれてくることをどう見せるかは、いつも難しいなと思っています。アーティストがリサーチして、色々な人に出会って、つくっていくことによって、新しくそこで何か始めたりする人が生まれる。でも、最終的に展示すると、作品だけになってしまつて、そこがうまく伝わらない。例えばこの前、塩竈市杉村惇美術館で Voyage という、そのエリアをリサーチすることを前提とした若手作家の公募プログラムがあり、その成果として二人展が開かれていました。作家のひとりの阿部明子さんは、鹽竈（しおがま）神社で数学の難しい問題を解けたときとかに奉納する「算額」のことを知り、そのうえ阿部さんのお父さんも奉納していたというのがわかり、阿部さんはそのことをテーマに、写真をいろんな法則によって切り貼りして、算額と同じような木枠の中にコラージュ作品をつくって展示していただんです。作品をつくるプロセスは地域の神社とつながっていたり、算額に連動したワークショップをやったり、シヨツプで算額研究会の冊子を買っていたりする。行って読み解くと、色々なことつながっている。明らかにその関係があるから、美術館がその関係づくりをするハブとして機能してきたからできたとかわかる。杉村惇美術館としても、それは成果だと思っているのだからうけど、展示を見る以外に、そこを伝えるいい方法はないかなと考えさせられました。

美術館に直接関わりはないのですが、一つご紹介したいことがあります。岩木遠足というイベントを実行委員会形式でやっていて、岩木山を象徴として、当たり前かもしれないこととしてよく考えてみたら生活を見直すきっかけになるんじゃないか、というイベントを立ち上げました。トークとワークショップとライブが合わさつてるような。バス遠足みたいなかたちになっていて、弘前中心にさまざまな分野で活動しているところに遊びに行つて、そこで、お話を聞いたり工芸体験をしたりして帰ってきて、それに対してのディスカッションをしたりというようなイベントを4年、5年やっていて、それを本としてまとめました。例えば石川直樹さんに出会っていたり、もう亡くなられた森のイスキアというおむすびとか食べものを通じて人の心に寄り添うという活動をされている佐藤初女さんにも出ていただいたり、あと無農薬林檎をつくった林檎農家の木村秋則さんや、マタギの人に出会っていたりとか、いろんなジャンルの方に出会っていただきながら、自分たちの生活を振り返る、見直すきっかけになれば、というイベントをしています。

最終的に書籍というかたちで残したんですけど、ただの記録集ではない。岩木遠足をディレクションしていたのが豊嶋秀樹という方ですが、彼はYOUNGのときの空間構成をした人なので、それがきっかけで弘前に毎年来ています。彼が最終的にいままでの活動をまとめたかたちが「小説」だったんです。岩木遠足の1日を小説にした。会いに行つて、お話を聞いて、こういう感想を持った。次にここに行つて、というのを一つの物語として語ることで、残すことにながるんではないかということで、いわゆる記録集のような写真とか報告とかは一切ないんです。本当に文字だけで紹介しているのですが、これがこのイベントに関しては、残し方として適当だったんじゃないかという判断です。

小杉 いろいろな方が書いてるんですか。

小杉 終わつたあとに、関わっていただいた方にあらためてインタビューをして、それを文字起こしたものを豊嶋が読んで

小説に残すというかたちでした。彼自身もヒアリングに行ったりもしたんですけども、手が回らないところはスタッフで行って。

佐藤 弘前は、小さいイベントがたくさんあるんですか。

大澤 多いですよ、イベントは。

小杉 そうですね。クラフトフェアから、音楽イベントから、ちょっとしたバザーのようなものから、ほんとに毎週末に何かやっている。

やっている側の意見としては、どうしてもそれが点になってしまっているんで、それをうまく線とか面につなげられたいねという話はするんですけども、なかなかそれが難しいところもあって。

佐藤 横のつながりはあるんですか。

小杉 組織間同士の横のつながりは結構多いと思います。仮に誰かぽつと新しいイベントを始めたとしても、こういうことをできる人がいるんだったらうちにも来てとか、何かイベントを始めるのと引つ張りだこになるみたいなのところもあったりしますね。AとBのイベントがあって、それに関わっている同士は仲が良かったりするんですけど、じゃあ、AとBのイベントがくつつくかといったら、それはまた違う話みたいです。

小林 美術館の立ち位置は、そのなかの一つになる感じでしょうか。

「美術館が面白いから行きたいよ」

小杉

仕事だったり、それも対作家だけじゃない部分の仕事量ってすくすく多くなってくると思うんです。運営の部分でいまの時点での手応えと、あと同時に大変かなと思っている部分はありますか。

私たちもちょっと前なんですけど、地域の皆さんと芸術祭をやっていたことがあって。それはすくすく手間暇もかかるし、その分すくすく人も関わるパイプもできるし、地域のことを博物館資料と重ねて外に出せたりと、すくすく楽しい作業ではあったんですけど。通常でもそれなりに大変な美術館・博物館業務を、さらに広げちゃうわけじゃないですか。それを破綻しないでどうやっていくかというところが、自分としては課題としても持っていて。

いまお聞きしていて、開かれた部分、ハブの部分というのをすくすく大事にしていることとされてることが伝わってきてすごいなと思います。

小杉

実際にやってみないとわからないというところもあるんです。われわれのなかでも打ち合わせとかに出でびっくりするのは、それは地元の人たちのためになっているのかとか、弘前にちゃんと根付くのかみたいなことを、みなさんおっしゃるんです。それが本当にプライオリティーが高くて、みなさんの意識のなかにあるんだというのは感じます。こういうこともやってみたい、ああいうこともやってみたいというのが、もう溢れてくる。じゃあ、これは誰がやるのというところ、ううんって(笑)。

大澤 温めて取っておくこともありますね。

小杉

できて終わりではないので、できてからが始まりなので。そこからどうつくっていくかは、市民の人とどう美術館をつくっていくかというところだと思ってる。

なれたらいいなあという。地元の人たちに愛されるというか、使いたくなるような美術館になってほしいみたいな意見があって、例えば外から来た人に「弘前なんか面白いところない」って聞かれたら、「美術館が面白いから行こうよ」と言える美術館になってほしいし、そういうふうで紹介していきたいということも意見としてもあったんで、ぜひそういう美術館として、この町にあればいいなというふうに思いますね。

小林

会津若松市の北側の喜多方市で、いくつかのアートプロジェクトをやらせてもらっていて、いろんなプロジェクトが動いていたんですよ。私たちは林立している状態のままにして、それぞれにちよつとずつ関わっていました。全体が見えるようにということも試みたんですけど、あまりうまく機能しなくて、そういうのって難しかったりするんですかね。

大澤

美術館が一種の情報センターにもなればいいなって。文化とか、いろんなカルチャー、アートに関心がある人に、こういうものもありますよと。

小林

情報が入ってくる場所、収集できる場所。

小杉

弘前には洋館とか昔の建築と、日本の現代建築を代表する前川國男さんの処女作があって。前川建築は八つ現存していて、それを目的に若い学生さんとか、建築に興味のある人が来たりします。あとは、こぎん刺しとか、こけしとか、津軽塗りとかが、そういうクラフトを求めて来る子がいいます。そして今回、美術館ができる。建築やクラフトはとても近いところでもあるので、美術館に来た人にそういったところをご案内できるような枠組みがつくればいいなというので、一つコンシエルジュというかたちを考えています。本当にいろんなコンテンツがあるので、それを美術館で紹介できたらなと。

あと継続的というのは難しいところもあると思います。先ほどの岩木遠足というイベントも、5年続けていくと関わってきた人たちの環境ってどんどん変わっていく。子どもができた。仕事が忙しくなった。親の介護とか。そういう時にそれを無理して続ける必要があるのかといったら、それはないよねということになって、それこそ生活を振り返るためのイベントなのに、自分たちの生活を苦しくしてしまう意味がない。それは、じゃあ、ここで1回閉じましようという判断をしました。物事を終えることというのは、別に悪いことではなくて。ただちゃんと丸をつけることが必要だなと思うんです。ちゃんと終わらせるときは終わらせるということには、必要だと思いますね。

小林

なるほど。ところで、この年表に震災のことも書いてありますが、弘前はとうだったんですか。

小杉

おかげさまで弘前は大きい被害はなくて、半日ほど電気が止まったり、物流が滞ったりしたぐらい。でも、同じ東北として、特に僕たちと同じ世代というのは意識ががらっと変わったというのがありますし、弘前から積極的に支援に行くという動きもありました。

あと先ほど言ったお祭りのようにいろんな団体があって、この週末は若手のほうに行つて、ちよつと支援してくるというお話をしていたりとか、そういった市民レベルで、自分たちは大丈夫だからいろんな地域に手助けに行こうという動きが高まった感じはありました。それができたのは、やっぱりお祭りがあったり、いろんな団体があったり、そういったチームがあったから。僕も誘われて何回か行つたりしました。

とはいえ、青森県内は原発が多くて身近な問題としてありつつも、そこまではなかなか直視できない部分も、やっぱり周りを見てるとありましたね。そうしたジレンマというの、やはり震災以降あるのかな。

小林

ライフミュージアムネットワークの前身の事業で、福島を伝える作品を持って行って展示をする成果展を後半やっていたんです。静岡でも展示をしたんですが、静岡も浜岡原

江川 いいですね。地元の人が、あそここの美術館を案内したいって思ってくれる。

小杉

高校生のデートスポットとかね(笑)。

江川

ライブラリーとか、ちよつとした学習スペースみたいなのがあるので、高校生が来やすい場になるかもしれないですね。ましてや無料というところが。

小杉

しかも65歳以上も無料です。それは弘前市民限定の65歳以上なんですけど、もちろん市民、弘前市の子どもたちもそうですけども、いろんな方に来てもらえたらなと。

佐藤

ちよつと先日、気仙沼のリアス・アーク美術館でお話を伺ったのですが、美術館では常設展で食をテーマに美術のアプリーチを駆使して、民俗資料を見せていました。たとえば気仙沼にはこういう漁があって、こういう食べ方がありますといった展示がされていました。気仙沼に外から人が来たら、まず美術館に連れて行つて、飲み屋に行くとか、食べものがおいしくなると地元の人にいわれているそうです(笑)。

大澤

素晴らしいですね。

佐藤

企画で地域外から人を呼ぶよりも、地元の人にいかに常設を使つてもらおうかという方向に仕掛けていました。

小林

最近コミュニケーションの核になったり、ハブになったりという機能を重視する美術館が増えていきます。そこを担うのと、通常の学芸業務とはやはりだいぶ違う。現代アートはもともとそういう部分はあるとは思ってますけど、人と接する

発があるじゃないですか。あそこも中部電力のお膝元みたいなところもあって、みなさん気になってるんですけど、話しくかかった。だけど、福島のものを持って行ったことがきっかけになって、福島の話をしつつ、じゃあ、静岡はどうなんだろうって考えることができたと言つてくださったんですよ。だから、それは福島役の役割の一つなのかなと思つてもいいです。

小杉

そこはHarappaの活動で、震災関係の映画の上映を定期的にやっています。最初に上映したのが10万年後の安全というフィンランドの放射性廃棄物の最終処分場の映画でした。すくすく興味関心が高くて多くの方が来てくれました。ただそれが身近になっていけばいくほど、客足って遠のいていくんですね。あれはフィンランドの話で、なおかつ、原発の話は興味がある。でも、福島の話になると、ちよつと少なくなってくるという、遠くの問題だと見られるけれど、近い問題になればなるほど、なかなか直視しにくくなるというのは、映画上映をしていると、客足という部分でよくわかる。

小林

2011年からの時間的な経過で、みんなが少し距離を持って見られるようになった時に、福島が一つのきっかけになれたらうれしいなと思いますけどね。

そろそろお時間ですね。お忙しいところ本当にありがとうございます。

八戸市では「はっち」がユニークな活動をするミュージアムとして知られ、街中では地域資源を活かしたアートプロジェクトが展開しています。そして、2021年夏には八戸市新美術館が開館します。

八戸市まちづくり文化推進室の大澤さんからは、地域の芸能や工場地帯という立地を活かしたアートプロジェクトについて、またそこで紡がれた関係性が新美術館にも引き継がれていることをお聞きしました。

新美術館建設推進室の高森さんからは、美術館が人々の学びの場、活動の場となり、様々な種がまかれ、育ち、外へと広がっていくこと、アートを通して培われた創造性が美術館外の活動においても活かされていくことなど、アートによるまちづくりを進める八戸市のビジョンについてお聞きしました。

美術館から社会をつくりだしていかうという、ミュージアムの可能性を学んだりサーチでした。

【その1】

日時 : 2019年10月31日(木) 9:30~10:30  
 リサーチ先 : 八戸市まちづくり文化推進室  
 お話しをお聞きした人 : 大澤苑美氏(八戸市まちづくり文化推進室文化推進グループ主事兼学芸員)

【その2】

日時 : 2019年10月31日(木) 11:00~12:00  
 リサーチ先 : 八戸市まちづくり文化スポーツ部 新美術館建設推進室  
 お話しをお聞きした人 : 高森大輔氏(八戸市まちづくり文化スポーツ部 新美術館建設推進室参事・建設推進GL)

調査者 : 佐藤李青(公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京プログラムオフィサー/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)  
 小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)  
 江川トヨ子(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)  
 塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

県外事例調査

八戸（その1）

八戸の文化政策

大澤苑美

八戸市は、八戸ポータルミュージアムはっちとアートプロジェクト、最近では八戸ブックセンターも加わって八戸の文化政策を先導して来たと言えます。市長自身が演劇部出身だったこともあって、理解をしてくれているというのと、面白いこと、とんがったことをやってほしいと言ってくれてすごく助けられています。

もともと八戸三社大祭の山車小屋を中心街につくる話があったんですけど、何回か通えること、市民の文化活動を支えられるようにということ、はっちに変わっていったという経緯もあります。そのあたりから八戸は文化政策をまちづくりの一貫としてやっていく流れができてきました。組織のかたちも、もともと文化スポーツ振興課だったのが、まちづくり文化観光部(現・まちづくり文化スポーツ部)になりました。どうアートのまちづくりをしていくかということ、熊倉先生をアドバイザーとしてディスカッションを1年間やって、そのなかで、はっちだけではなく、アートプロジェクトもやったほうがいいんじゃないかというアイデアが出てきました。職員から、こういう資源だったらできるんじゃないか、こういうのをやってみたいという種が出てきて、でも、それを実際にやるには人がいるよねってなって、それが私だったという経緯ですね。

まちづくり文化スポーツ部のなかに、私のような文化推進グループや中心市街地の活性化グループもありますし、ハイドの整備をしたり景観を担当するまちづくり支援グループもあります。私たちが管理している指定管理の文化施設として八戸市公会堂・公民館、南郷文化ホール等があります。文化推進グループと並列のかたちで、はっちと新美術館建設推進室と、八戸ブックセンターとがあるという状況です。

小林めぐみ  
 観光とは別なんですね。

大澤

八戸市で観光は商工労働観光部で、より地場製品の販売や商業的なことを目指すようになってきています。観光目的のアートではないということが、八戸は組織的にも如実になっているのかなと思います。社会教育課では三社大祭のユネスコ登録などを担当していて、是川縄文館、八戸市博物館はここに所属しています。

南郷アートプロジェクト

私からは、南郷アートプロジェクトと八戸工科大学の話しようと思います。まず、南郷ですが、旧南郷村が八戸市と合併して、今の人口は5,000人ぐらいです。合併の後の時期、平成20年に南郷文化ホールが開館しました。5,000人しかいないのに450席の文化ホールがオープンした。

小林  
 それは合併前からプランがあったんですね。

大澤

そうですね。つくってしまったけど、このエリアだけではカバーできない。では、八戸市としてどうしていくのかというのには考えなければいけないという課題がありました。合併した二つのまちの心理的距離感を縮めるというような行政的な課題もあって、土壌をまとめるという必要もあったと言われています。

一方で、結構芸能が残っているとか、もともと村おこしのために始めたジャズフェスティバルが30年続いているとか、ホールはそういったことを生かすためにあるよねと。ホールでできることというので、身体表現系や、ジャズやダンスでやっていこうということ、最初にやった企画がこれです。(まちのなかに飛び出て、ダンスの森下真樹さんと、八戸市内でジャズをやっている人たちと練り歩くパレードをしました。昔はお祭りがあつたら、こういうふうな村の人が出て来てやってほしい。最近、もうやっていなか

つたので、久しぶりに賑々しくやって、村の人たちも驚き半分、楽しさ半分みたいな感じで「南郷アートプロジェクト」が始まりました。なんだかよくわからないけれども、こういうことをやるもんなんだなというところから始まった。

小林  
 お祭りはなくなっちゃったんですか。

大澤

そうですね。昔はお神輿を担いだりしたらいいんですけど、そういうのはなくなっちゃいました。他に、神楽もあるんで、神楽の人たちと一緒にパフォーマンスをしましよと、南郷のヒマワリ畑に特設のステージをつくって公演しました。あとは、ダンスコレクションという企画で、地域の人たちのたんに眠っているワンピースを提供していただき、高校生や大学の若い人たちがモデルになって、自分で振りを考えてランウェイを歩くファッションショーみたいなこともアーツとやりました。ジャズの人たちに生演奏で入ってもらって、その曲で踊っていくとかです。





小林  
高校生と大学生は八戸の。

大澤  
八戸市内です。何人か南郷の子がいました。

ホールの企画で、プロのコンテンポラリーダンスと、地元のアマチュアのジャズバンドの人たちと、生音でダンス作品をつくっていくというシリーズもやりました。6回ぐらいやっています。これをやるようになって、地元のミュージシャンたちの性質が変わってきました。最初は面倒くさくて、なんでこんなやんなきゃいけないのかみたいな顔をしていたのが、やってみるとやっぱり楽しいので、なんだかよわかんないけど、手間もかかるけど協力してもらいかなみたいなの、そういう雰囲気が出てきたところはああるなと思いますね。

映画をつくるプロジェクトは、南郷エリアの三つの小学校を統合するという事で廃校になる小学校があって、せっかくだったらこの学校に一つずつ記憶と記録を残しましうかという企画でした。ちょうど閉校まであと3年という段階だったので、じゃあ、1年に1個ずつつくっていき

間に合うねということで、子どもたちと先生たちと、地域の人たちにもエキストラになってもらって、映画をつくりました。ダンス映画というかたちで台詞もそんなにはないので、最小限のクルーで、監督さんが全部自分で撮って、編集もしてという感じでした。

舞踏の大駒船艦のみなさんに来てもらって、地元の芸能「えんぶり」にまつわる公演もしました。八戸地方には「えんぶり組」が二十数組あって、町内会をベースとした集まりで、五穀豊稔祈願の舞踊をする文化があるんです。そのうちの南郷のえんぶり組に関わってもらって、振付家の田村一行さんに「実はこういういわれが自分たちにはある」というところを抽出してもらい、えんぶり組に関わる伝承を舞踏で表現した作品です。東京の彼らの拠点でも再上演してもらったのですが、関東に住む八戸出身の方やえんぶり組のご親戚が偶然見てくださって、面白い縁が生まれています。

ジャズフェス25周年だったかな、ミュージシャンの発案でフラッシュモブをやるとういう話になって、150人ぐらいのミュージシャンが集まりました。合唱の人も含めて、なぜかジャズフェスで『第九』をやるっていう(笑)。同じ音楽でも、ジャンルが違うとあまり接点がないそうですが、「うちのバンドこの楽器が足りないんだけど」と別のジャンルの楽器の人を誘ったりするなど、交流も生まれました。それから、クジラを捕りに出稼ぎに行っていた人たちのお話を聞いて、演劇をつくりました。十和田出身の演劇の方で「柿喰う客」という劇団を主宰する中屋敷法仁さんに頼みました。おじいさんたちは方言が「ネイティブ」なので、私も聞き取れないところが結構あるんですが、中屋敷さんはこちらの出身だからわかるんですね。アーティストに通訳しなくてよくて助かったと思います(笑)。

それ以外には、はっちの事業で八戸に滞在していたアーティストの山本耕一郎さんが、もって八戸に住みたいから、家を探したいと。南郷にいいところが見つかったんですが、こみ屋敷で、そこを、地域の人みんなで掃除して手入れをしました。彼と、閉所する保育園でプロジェクトを、コンビエンスストアをつくって考えてみるアートプロジェクトです。また自宅のリビングを会場に、新しい交流の場たちをつくらうと、月替わりマスターを決めて飲み会を開

もうひとつ、私が企画運営しているアートプロジェクトに、八戸工場大学があります。工場とのアートプロジェクトを発案したときは震災前で、産業観光や工場夜景クルーズにも発展できるんじゃないかという期待で、企業に相談を持ち掛けていました。でも、あまり企業の方は乗り気ではなくて。構想だけあったものの、進んでいませんでした。

### 八戸工場大学

#### 工場が元気ということが、八戸の元気

震災で海に面して立地する工場地帯が被害にあって、私たちがいつも見ていた工場の煙突からの水蒸気が止まり、製紙工場の紙のロールがころころ転がっていました。その後、今日はここが復旧した、今日はこの水蒸気が出始めたという状況に、日常に戻ってきたことを感じました。工場が元気ということが、八戸の元気なんだということをおみながさんが実感したときでした。工場というのはものをつかってそれを売っている経済活動のなかの存在というだけではなくて、もう少し文化的な文脈から捉えることができるんじゃないかという視点で、再度、アートと工場を結び付けた活動を考えることになりました。

最初は工場見学ツアーやディスプレイションをして、工場のことを扱ったフリーペーパーづくりをしようと思ったんですが、うまくいきませんでした。工場見学にはすごく人が集まったんだけど、日常的に活動をするタイプの市民ではなかった。工場見学に行ければそれでいい、みたいな。フリーペーパーをつくりたいというと、ファッショナブルな感じで関心を持つ人もいるけれど、そういう人は特に工場が好きというわけでもないで活動が続かなかったり。その結果、これは「工場好きのおたく」とやらないと駄目だということに行き着きました(笑)。工場が好きなたちとやるという発想に切り替えて、年間を通じて工場のことを遊んでみる、みたいな活動ができたということ、八戸工場大学に至りました。

八戸は漁港と工場が一緒に見られるような場所があったり、住宅街の川向かいにセメント工場があったり、物理的にも心理的にも工場との距離感も近いですし、働いている人はもちろん、その友達や家族もいる地域です。



工場大学を2013年に立ち上げました。大学になぞらえて講義や課外活動、サークル活動を構成しています。本当は工場と一緒にアートプロジェクトをやりたいというのが、アート企画側としての思惑なんですけど、ただ、最初から、私と一緒にアートプロジェクトをやりたいかと言ったところで、工場の人たちからは門前払いなので、まずは工場が何をしているか教えてくださるところから。安全性や企業秘密もあるので、工場見学も結構ハードルが高くて。そのためには、工場の人を招いて、まず私たちが学んで、仲良くなった上での見学という展開にしたいかなと難しいだろうと、まずは地道に講義から始めてみました。講義では工場の人たちの話を聞いたり、アーティストを呼んだりしました。地元のアーティストと八戸のセメントを使ったレリーフをつくってみたり、紙の工場から出た廃材の紙で作品をつくるワークショップをしたり、工場をテーマにして絵を描いているアーティストの方に来てもらってその人の作品紹介をしたりしています。

く。地域だとお年寄りはお年寄りが集まるし、集まり自体が固定化しちゃって、移住してきた人や久しぶりこちらに戻ってきた人も含めて交流できる場所が足りないねって。いろいろプロジェクトやりました。食のアーティストのEAT & ART TAROさんと、「文通」の食(バージョン)、四国の食文化と八戸の食文化を交換し合うというプロジェクトもやりました。

それから、おじいちゃん、おばあちゃんたちに、昔の話を聞いてそれをカルタにするというプロジェクトも。ここに嫁に来たときの話や、昔は葬儀のときに座棺を使っていた話、そういうあまり書物に残らない話を聞き集めました。確かな生き字引の方から、そういう博物館に収蔵されないものを聞き出そうとカルタをつくりました。絵も言葉も写真も地元のクリエイターに頼んでつくったプロジェクトでした。

小林  
2回目はあるんですか。

大澤

2回目はどうだろう。南郷アートプロジェクト自体、来年新美術館ができる前で一回区切ろうかという話になっています。今度は、美術館も含めたかたちでの八戸芸術祭ができるというののはありますけどね。

佐藤李青

アーティストは続けて来ているんですか。もしくは毎年変わっているんですか。

大澤

続けてきてもらっているアーティストもいるし、そのとき限りでお呼びしているアーティストもいますし、いろいろです。

江川トヨ子

それはどこでやっているんですか。

大澤

毎年違います。まちなかのビルのシェアオフィスや、はっち、旧美術館の講義室とか。最初のころはアートワークショップです」と言っていると、途端にその日の受講生が減るような状況だったんですけど、最近そうでもなくなってきました。

工場見学も、最近は北日本造船さんが受け入れてくださったり、一般の人誰でもだど困るけど工場大学だったらいいよと言ってもらえることが増えました。

市民の方たちと運営するというかたちで、事務局には工場好きの市民の人たちにも入ってもらっています。アドバイザーの人や工場の人、デザイナーの人が関わりながらやっていくという仕組みを取っていて、なかなかうまくいったなという感じ。こちらが学長。

小林  
学長さんは何者ですか。

大澤

学長は、もともと工場夜景を撮影するファンクラブを立ち上げていた人です。八戸経済新聞というネット新聞の編集長です。メンバーには実際に工場働いている人や、印刷会社経験者などいろいろです。

小林

会社にとっても、工場にとっても、自分のところで何をしているか知ってもらおうというのはプラスでもありますよね。

#### 誇りにつながっていく

大澤

そうですね。公害などのイメージもあるけれど、本当は悪者ではないということを知ってもらいたいというのが工場の人たちにはあって。煙突から出ている煙、あれはほぼ水蒸気なんだとか、工場好きの人も知らない話があったり。これだけ環境に気を使っていることや、世界にものを売っているとか、スマホの材料になっているとか、そ

いったことを知ると、八戸です。いい人がいるんだという誇りにつながっていくというのは大きいのかなと思います。講義をするなかでアートプロジェクトも生まれてきました。最初は「工場大学文化祭」と題する展示をしました。手法が好きな受講生が多かった。その人たちと工場グッズを考えた。写真のチームは、工場撮影のおすすめポイントを実際の写真付きでマップにしたり。それを商店街の中のスペースで、文化祭みたいなかたちで展示しました。このときはまだ製品にはなりませんでしたが、最近、マスクングテープなど販売しているグッズもあります。

**炎を愛でるイベント**

次の年です。誘致企業である、液化天然ガスのターミナルが来年オープンしますというタイミングで良い情報が飛び込みました。船で液化天然ガスが運ばれてきた後の、最初の試運転時に鉄塔から大きな炎が出るという情報を、市長が企業の方から聞き、「炎が出るらしいから、アートのイベントでもやれば」と。私たちは「そういう情報を待っていました！」みたいな感じでした。市長は、「煙突だからサントクコースでも付けたいんじゃないか」なんて冗談を言って、企業の人に「それ燃えますからやめてください」と言われていました(笑)。私たちは、炎を愛でるイベントをしようという提案しました。

液化天然ガスが気化する温度がマイナス162度。マイナス162度の炎ってどんなだろう、何色が出るんだろうとか、初めて出る炎なのでそれをみなさんで見ましよう。近くのビルと屋上にイベント会場を設けました。

通常鉄塔から炎が出ると、火事じゃないかとか、爆発しちゃうとか苦情の対象になるらしいんです。ですが、我々はイベント情報として新聞に載せたり事前告知をしていたので、市民の人の価値観が「炎が出るんだ。楽しみ」というように変わって、「おかげさまで苦情が来なかったです」と企業の人に言われました。それどころか、船の到着が遅れて「日炎が出るのが遅れたんですが、そうしたら「なんでも出ないんですか」「いつから出るんですか」という問い合わせが来たそうです。逆の効果が出た。

**通じ合えたのがとてもよかった**

工場とのアートプロジェクトは、毎年やるとは決めていない。次によってくれる工場を探しながら、やれるタイミングでやっていく感じです。2018年は、火力発電所の大煙突が取り壊されることになって、電力会社の人たちと一緒にアートプロジェクトやりました。このときには、大量の電気をつくっている発電所がありながら、お客さんに自転車をこいでもらって人力発電して、お世話になった煙突をライトアップしました。多くの発電所職員の人たちが関わってくれたというのは大きかったです。日常入れない工場の中をイベント会場にさせてくれましたし。

小林  
工場大学をやったこれが大澤さんの実感として、工場にこのプロジェクトで文化をつくった感じですか。それともともと文化はありましたか。



次は2017年にまた別の工場で、煙突から出る煙は水蒸気だということをみんなに知ってもらうイベントになればと、その水蒸気を光でライトアップするというのをしました。工場にお願したら、最初は躊躇されていた様子だったんですけど、まずは安全にできるかどうかを見せました。ここが、ここにライトを置くのだったからいいですよ」と言っていた。私たちは、どこでも、はい、やりますというつもりで満ちたが(笑)。それから、工場の人ももちろんどうなるか気になるし、興味を持ってください。お金はあまりなかったんで、プロジェクトで工場の水蒸気に文字を投影しました。この工場がちょうど60周年でした。冬場寒いときに、はあつて白い息を吐くのと同じ水蒸気が出てくるわけなので、工

場を擬人化し、工場が60歳のおじさんだとしたら、60歳の工場おじさんがしゃべったら何をしゃべるだろうかというプロジェクトにしました。「わしの生い立ち」みたいな話や「この煙は、いま君たちの吐いている息と一緒なんだよ」みたいにナレーション付きで文字を工場に投影しました。工場の人たちも乗り気になってくれて、この日に最大限の水蒸気がもくもくと出るように、操業調整もしてくれました。水蒸気が強すぎて用意した光が届かなくて、見栄えとしてはあまり美しくなかったかもしれない(笑)。何が美しかったって、水蒸気もくもくとたくさん出ている様が美しい。

大澤  
工場からも、総務部長さんに「工場で働いている人たちも普段、お父さんの会社って何をやってるのってよく言われている。家族があつての従業員。従業員あつての工場っていうことを考えると、家族にもどういう工場なのか理解してもらおうとがすごく大事で、そういう機会になったかもしれない」とおっしゃっていただけました。それは「ぎつと市民も同じことだと思えますよ」と、私たちの思いもお伝えしましたが、そこで通じ合えたのがとてもよかったです。

小林  
照明のテクニカルなところは、ホールの人などが手伝ってくれたんですか。

大澤  
そう。南郷で舞台系のことをやっていたので、公会堂やホールの照明さんをお願いして、これぐらいだったら当たりますかね、みたいな実験したりとかして。

江川  
風の影響とかもね。  
**やるタイミングでやっていく**  
大澤  
そう。だいたい冬は水蒸気がこっちに流れるとわかっていたのでなんとか。本当は逆に吹いてくれたら、もう少しきれいに当たったんですが、仕方がない。この日は風が穏や

大澤  
もともと文化もあつたんでしょけど、かなり変わってきました。マインドがオープンになってきたというか。一般市民の人たちが介入することによって、工場の人たちも自分たちが認められる存在なんだ、それだったら、もう少しこういうことに気を付けたほうがいんじゃないかなとか、コミュニケーションが生まれるようになってきたのは、すごく面白いことだと思います。

**みんなで考える場所**

来週は、工場から出た廃材を工作材料にするというような、イタリアでやっているシステムを八戸でもできないかを検討する講義をします。工場の人にも、急ぎよ来てもらうこととして、例えば「廃材と言っても、うちとしては商品になるものなんです」「それは危ないのであげたくもあげられません」という事情もあるかもしれないけれど、一方で幼稚園の先生が工作材料は材料費がないので自分で買ったり集めているという現実もあつて、そういう現実の課題と、工場があるということ、工場大学をやっているということ、この土壌を合わせるって何ができるのではないかと、う話を受けて、それをみんなで考える場所にしましようということで開催します。

小林  
工場の方たちは、プロジェクトに協力してくださいるところから、自分と直接関わらないところまで足を運んでくれるような展開はありますか。

**一緒にできる土壌**

大澤  
工場の方に「こういうプロジェクトを他でもやっているの、職員の方にお知らせをしていただけませんか」と送ると、「いまPDFにスキャンして、全職員に配付しました」と言ってくれたことがあります。そういう意味で、私たちの美術館ができていくなかも、美術館の案内を送りやすくなりました。あるいは、工場のなかには外国人の労働者を受け入れているところもありますが、そこから見

る八戸の国際化ってなんだろうって考える切り口もあり得るし、工場の人たちと一緒にできる土壌にはなっているんだらうなと思っています。工場大学に来ていた人たちも、工場が好きなんだけど必ずしもアートが好きじゃない。けれど、工場を切り口にアーティストの話を聞いてアートの興味を持ち、南郷の芸術祭に来てくれたり手伝ってくれたりしたことがありました。

**横につながっていくんだ**

大澤  
最初はこんなことを一緒にできませんかっていう話を持っていても、断られて、そんなに確かに簡単なことじゃないなと思っていました。こちら側で勝手に工場アート展をやることはできても、工場の人たちと一緒にやるとなるとハードルがあります。いつになったらできるかと思っていたら、ラッキーなことに、煙突の炎の話が来ました。大企業ということもあり、社会貢献のことも理解してくださって、よいスタートとなりました。ひとつ事例を作ることができれば、他の工場も関心をもってくれるかなと期待しました。

工場の横のつながりは、業種関係なくあるんです。総務の会とか、安全講習会とか。「この間、工場大学に行ってきたよ」「今年が私が講師でいくことになったけど御社が講師の時はスライドどうしましたか」って話がされるらしいんですよ。だんだん工場間で「工場大学」が知られていくことで、新たに講師のオフアール話を持つていって「チラシは見たことがあります」とか「何々工場さんから聞いたことがあります」、あるいは「自分の息子が、別の講義の講師である〇〇工場で働いているので自分も受講生になって受講したいな...」というような話ができるようになってきました。工場同士も市民も横につながっていくんだということが、だんだん私たちもわかってきました。

小林めぐみ  
福島県立博物館を事務局として、ライフミュージアムネットワーク実行委員会という委員会を立ち上げ、昨年度から事業を行っています。ミュージアム間のネットワークをつくり、2011年以降の福島で起こったいろいろなことを教訓として、きちんと未来にも渡せるようにすることを目的にしています。

この事業の一環として、福島県内外の先行的な事例、活動をされているところに学んで、それを福島に持ち帰りたいということでもリサーチ活動もしています。どうぞよろしくお願いたします。

アートのまちづくり

高森大輔

こちらこそ、お願いします。

今日は、新美術館整備の構想についてお話をしようと思います。その前に、うちの組織を少しご説明します。八戸市の文化のセクションは少し複雑になっています。もとは教育委員会の中にあっただんですが、もって文化をまちづくりや観光と密接に関わらせたいという市長の思いがあって、教育委員会から切り離して市長部局に移管したんですね。それでできたのが、まちづくり文化スポーツ部です。去年まで観光も入っていて、まちづくり文化スポーツ観光部という、長い部署名になっていました。教育委員会にも、社会教育課という文化のセクションは残っていますが、公民館活動や文化財関係などを担当しています。八戸市博物館と川縄文館、それから南郷にある歴史民俗資料館は引き続き教育委員会にあります。美術館は街中にあるので、教育委員会から切り離して、まちづくり文化スポーツ部に移管をしたという経緯があります。

先ほども話しましたが、市長の意向もあって、震災の1年前に、アートのまちづくりをしようという構想ができた

これは青森県内では初めてです。あと、創造都市ネットワーク日本(CCNJ)ができた当初から、八戸市も参加させていたいただいています。

旧美術館は昭和44年に建設された旧税務署の庁舎をリノベーションして使っていたので、美術館としてふさわしくない、外からお客さん呼ばなくて恥ずかしいみたいな声もあって、ずっと新しい美術館がほしいと言われていたんですね。それでも、市ゆかりの方を中心に約2、800点を超える作品を所蔵していますし、年間平均35、000人の来館者がありました。一番多かったのは平成27年、閉館の2年ぐらい前ですが、年間48、000人が来館されたということもありました。

収蔵品は、寄贈された市ゆかりの作家の洋画などが中心です。八戸は、書道をされる方も多くて、書作品も多くありますし、工芸に力を入れたこともあり、工芸の作品も多く持っています。展示会も企画展、常設、コレクション展など収蔵品を使った展示も合わせて年間7企画ぐらいやっています。本当は地元の作家さんのものを見ていただきたいという思いはあるんですが、どうしても集客面では非常に苦勞をしていますが、「魔法の美術館」や「ハロキティアート展」など話題性があるものを見ると、たくさん人は来るんですが、一見地味だけど本当に見て欲しいというような企画については、なかなか集客が鈍いという状況でした。いわゆるオーソドックスな展示というのを、旧美術館ではずっとやってきたんですね。

旧美術館

「アートのまちづくりの中核拠点として」

一方で「はっち」ができたり、地域資源をテーマとしたアートプロジェクトを行ったりするなかで、美術館がアートのまちづくりの中核拠点としてもっと機能できないかということも内部で検討されていました。また、施設の老朽化が著しくて、特に耐震性の面で懸念がある箇所もありました。こうした中で、市民から議会に陳情が提出され、採択されるというかたちで美術館の整備に至ったので行

新たな交流と創造の拠点 はっち

はっちひろば(1F)  
はっち(4F)

八戸ポータルミュージアム「はっち」はこのまちがもっと、このまちらしく輝くために、地域の資源を大事に想いながら、まちの新しい魅力を創り出すところです。

中心商店街の歩行者通行量  
(単位：10月第一日曜)

年	10月	10月	10月	10月	10月
	H10	H21	H22	H23	H24
通行量	26,055	24,978	22,486	24,176	32,669

はっちが持つ力やアートの視点をまちづくりにも活用しようという取り組みです。例えば、合併した旧南郷村を舞台とする「南郷アートプロジェクト」や八戸の産業を支える工場に着目した「八戸工場大学」といった、地域特性を活かしたアートプロジェクトを行っています。中心街にある八戸ポータルミュージアム「はっち」をはじめとするさまざまな特徴的な施設を核として、複合的にプロジェクトを展開したりしています。

はっちは まちを元気にします

- 1 市民の暮らしを元気にします
- 2 まちの魅力を発信します
- 3 美しいまちを創ります
- 4 市民の暮らしを元気にします
- 5 八戸の魅力を発信します
- 6 八戸の魅力を発信します
- 7 八戸の魅力を発信します

開館(平成23年2月)からの 延べ来館者数が 平成29年7月に **600万人!** を超えたいよ。

H22→H24 増加!

して、まちづくり文化推進室もできて、いまに至っている状況です。

アートが持っている力やアートの視点

政主導というよりは、市民の声がたちになったという経緯でスタートしています。また、美術館も中心街にできるので、中心街の活性化を担うという一面も持っています。

佐藤李青  
その陳情はどういう団体から出されたんですか。

高森  
八戸市民の有志の方々による「八戸市に新美術館を熱望する市民の会」ですね。

小林  
いい名前ですね。熱望。

高森  
「八戸市に新美術館を熱望する市民の会」が立ち上がって、「24万人都市八戸にふさわしい新美術館の建設を求める陳情」が議会に採択されて、市民の声から美術館の整備を考えていくということになりました。少し変わっているのが、隣接する銀行移転・新築と協同して新美術館を整備することで、民間と行政が一体となって、まちづくり、景観形成をしようという計画で整備を進めているということです。

整備スケジュールについては、平成28年度から本格的にスタートして、基本構想から基本設計、実施設計と進めてきて、平成31年4月から工事に着手したところです。オーブンは、令和3年度中を目指しています。

「アートエデュケーション・ファーム」

最初につくったのは、基本構想です。このときに掲げたのが、「アートエデュケーション・ファーム」というビジョンです。アートの力で人を育む美術館というコンセプトで、種をまいて、そこから芽が出たものを育てて美を結んだものを収穫して、また次の種まきにつなげるという、農場(ファーム)に例えて表現しています。いわゆる、いままでの美術館のやってきた、ただ作品を見て帰るということではなく、もっと積極的に能動的な学びが沸き起

これまでの八戸市美術館

- ・昭和44年に建設された、旧税務署庁舎をコンバージョン(用途変更)して、昭和61年に美術館として開館
- ・郷土にゆかりのある作家を中心に、約2,800点を超える作品を収蔵
- ・毎年、国内外の優れた作品による企画展や、収蔵作品の展示の他、市民の作品発表の場(市民ギャラリー)としても活用されている
- ・過去10年間の平均で約35,000人の来館者(H27は48,000人以上)



「地域の資源を大事に想いながら、新しい価値を創り出す」

特に、アートのまちづくりのポータルとしての役割を果たしている「はっち」は、オープン当初は何が目的の施設なのかわからない、という批判もあったんですけど、「地域の資源を大事に想いながら、新しい価値を創り出す」ことをコンセプトに、賑わい創出・文化芸術、ものづくり、観光の分野で地域の資源を活かしたさまざまな事業を実施しています。また、中心街の活性化を担う施設として市民の皆様非常に活用されてきています。毎年90万人前後の来館者があるって、中心街の活性化に寄しているということ、内外から認められています。いまでは、「はっち」は無駄な施設だなどという人はいなくなつて、むしろ、「はっち」がないと困るところまでできているかなと思っています。

八戸の文化やアートを使ったまちづくりが非常に評価されて、平成25年には文化庁長官表彰も受賞しました。このように美術館にしたいという思いが込められています。そのために、美術館の基本的な機能に加えて、エデュケーションセンター機能という人を育む機能と、アートのまちづくりの機能を合わせた三つの軸を持つ新しい美術館をつくらうと考えました。

これに基づいて設計者のプロポーザルを行いました。が、広く自由な発想を求めるため、過去の実績などにこだわらず、ほとんど縛りがないプロポーザルになりました。市内外から138社の応募がありまして、1回目の審査で5社を選定して、公開プレゼンテーションを実施しました。公開プレゼンテーションは「はっち」で開催したんですが、こういうのはなかなかないので、当日の傍聴者を募集したところ、申し込み初日のお昼に定員に達してしまつて、「なぜもっと広い会場でやらないのか」というお叱りの声もいただくくらい、たくさんの方に興味を持っていただきました。

設計者に、西澤徹夫建築事務所・タカバンススタジオ設計共同体を選定しましたが、われわれが基本構想で「アートエデュケーション・ファーム」として掲げたビジョンを読み解いて、「八戸ラーニングセンター」というコンセプトで提案をされました。特徴的なのは「ジャイアントルーム」という大きい空間があることです。普通美術館は、展示室の面積を大きく取りますが、この美術館の場合は人が活動をする空間を非常に大きく取っていて、日常的に作品やアーティストに接してアートの学びが自然と沸き起こるような空間を設計されています。

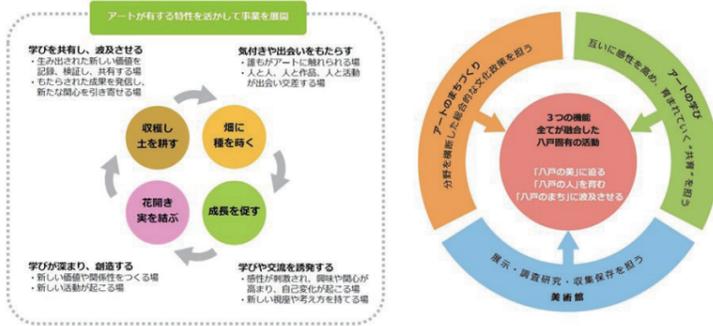
展示室やワークショップルーム、スタジオなど、それぞれ個性を持った部屋が「ジャイアントルーム」の周りを取り囲むように配置されていて、それぞれの部屋で行われている活動がくついたりみ出したりして、さらに学びが深まっていくような空間構成になっています。建物自体は、令和2年の秋頃に完成予定です。

「アートの学びを提供する美術館」

さらに、基本構想を踏まえて、より具体的な管理運営のあり方を示す、管理運営基本計画を策定しています。「アートの学びを提供する美術館」をコンセプトに掲げて、いろいろな活動から市民の能動的な学びがわき起こるよ

## 新美術館のビジョン

**種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館**  
～出会いと学びのアートファーム～



と思います。そのために、新しい市民参加の仕組みを取り入れたいと考えています。東京都美術館の「アート・コミュニケーションター」の概念を念頭に置いて、アートでコミュニケーションを耕す人、という意味で、「アートファーマー」と呼ばれる人たちが活躍する美術館にしたいと考えています。従来型の美術館ボランティア制度ではなく、「アートファーマー」を、美術館活動を担う重要な人材と位置付けて、自身が企画したプログラムの実施や、美術館運営の手助けなど、ファーマーの皆さんが考えて企画したものを実現できたり、そこで学んだものを自分が普段活動している職場や学校、地域で活かしているりと活動してもらったりと、美術館の活動を、美術の専門家だけではなく、市民と一体となつてつくりあげる仕組みを中心に置きたいと考えています。

### 「アート×○○」

もう一つ、アートの学びに関係して考えているのは、大学との連携です。八戸には、いわゆる美大はありませんが、市内にはビジネスや看護、保育福祉、工業、デザインなど、特徴的な学科を持つ大学・高専があります。芸術、アートの専門性を持つ美術館と、それ以外の幅広い分野での専門性を持つ大学と連携することによって、何か新しい分野を切り開けないかということで、大学さんとも話をさせていただいています。「アート×○○」がテーマで、「アート×福祉」や「アート×ビジネス」など、アートを異業種・異分野と融合させることで、これまでになかったような活動や、新しい価値を創出したいと考えています。そのために、美術館の中に大学の活動拠点を設けることを検討しています。

### アート好きな人だけが行く場所にしたいくない

とにかく、様々な活動ができますよと市民の皆さんにご説明をして、わくわくしていただいて、みんなで、今までの美術館でできなかったことをやろうということを意識しています。新美術館は、美術に関心がある人、アート好きな人だけが行く場所にしたいくないという思いがあっ

て、アートを通した学びで、みんながもつと地域のことを自分事として考えたり、社会の課題を自分なりに考えたり、人を育む場所、みんなの居場所にしたいと思っています。美術や美術館に興味のない人にもふらつと立ち寄ってもらって、そこに一日いたら何か自分がちよつと成長したような気になって帰っていただけたらと思いますし、そのためにも、ジャイアントルームは非常に活用できると考えています。

新美術館の運営検討委員を務めていただいている、日本大学の佐藤慎也先生を講演でお招きした際に、建築家の磯崎新さんが、自身が設計する美術館建築を説明するにあたり、第1世代、第2世代、第3世代という言い方をされているとお話しされていました。そこで佐藤先生は、八戸の新美術館は、その先の第4世代を目指すべきだと、人の活動やコトが含み込まれた作品を扱う美術館ということで新規性を出したらいいのではないかと話されました。これは大変だと思いましたが、われわれも、アートプロジェクトをはじめ、人を大事にするような活動を展開してきているので、そういうところを深く育んで、まちづくりへ活かしていくような美術館をつくって、少しでも理想に近づけられたらと考えています。

### むしろこっちのほうが面白いよね

最初、美術館を熱望した方々は、市内の美術関係者の方々が中心でしたが、より社会や地域に開かれた美術館にしたいと、シンポジウムや市民の皆様との意見交換会などを数多く行いました。そこで話していくうちに、美術関係者の方々だけでなく、あまり美術館に関心がなかったような方々からも、非常に期待されていると実感しています。もしかしたら、最初に皆さんがイメージした美術館とは違うものになっているかもしれないですが、むしろこっちのほうが面白いよねと言っていたいただけるように、われわれも頑張っていきたいと思っています。

### 能動的に関わるポイント

小林 どうもありがとうございます。少し質問させていただきました。

小林 報告会も先生たちの集まりの時間をいただいているんですか。

高森 そうですね。打ち上げに学芸員も誘っていただけたり(笑)。やはり日ごろから、学芸員と学校の先生がコミュニケーションを取ることで、学校の先生から「こういうことをやりたいんだけど、どうしたらいい?」と、気軽に相談し合える関係性をつくるということが大事だと思います。肩肘張った会議というよりは、もうちょつとくだけた場で、話せるというのがいいのかなと思います。

小林 学校との連携も、丁寧な打ち合わせの積み重ねは、やはり手間暇かかってくると思うのですが、担当者を置かれるんですか。

高森 一応、役割として担当割りはしますが、美術館の組織計画のなかでは、固定して担当するのではなく、それぞれの特性を生かしながら、プロジェクトによってチームを編成するので、みんながアートファーマーのことを理解してもらう必要があるし、みんなが作品のことを理解してもらう必要がある。そうしないと縦割りになって、もう私はこれしかやらないとなってしまうがちなので、そうならないような体制にしたいと思っています。

小林 福島県では県立美術館、図書館、博物館は教育委員会に、水族館は文化スポーツ局に属しています。組織が分かれていると一緒にやりにくいこともありますが、本当は一緒にやったほうが良いこともあって、文化政策の同じビジョンの下でそれぞれがちゃんと動いたり連携したほうがいいなと思っています。

先ほど、アート×○○のお話がありました。博物館が作家さんと組んだり、アートと組み合わせるときの利点もあるなとも思っています。美術館が地域のことを掘り起こしてみなさんと共有していくときには、博物館も○○

いてもいいですが。美術館の機能として、第4世代という言葉を出していらつしやいましたが、新しい在り方をつくり出そうとしていらつしやるところが本当に素晴らしいなと思いつつお聞きしました。みなさんが能動的に関わるポイントはどこになるのか、そこが難しくもあり、大事なところでもあるんだなと思います。こちらから少しずつ仕掛けをしていくんでしょうか。あるいは、すでにいろいろな動きが生まれつつあるんでしょうか。あと、開館してからの動きなどはどうなんでしょう。

高森 はい。美術館をつくるときに、まったくゼロではなくて、すでに「はっち」での活動や、アートプロジェクトを展開するなどの下地がありました。そこで関わっていただいていた方々がたくさんいます。始めるときは、どれだけ参加していただけるのか不安もありましたが、われわれも「市内にこんなに素晴らしい人がたくさんいるんだ」と新しい発見もあって、市民力は凄いなと思いました。そうした活動の延長に新美術館があるので、既に様々なプレイヤーが見えていて、いろんな活動の種が存在していますし、我々もまだ気づいていない、潜在的なプレイヤーもまだまだたくさんいらっしゃると思っています。

小林 そうなんです。

### ゆるやかなコミュニケーション

高森 本八戸駅前通りのラボを拠点に、アーティストの山本耕一郎さんが中心となって「まちぐみ」という活動を展開しています。まちを元気にしたい、まちづくり役に立ちたいと考えている市民の皆さんが組員となって、「なんか楽しそう」なプロジェクトを展開していて、組員さんたちはそれぞれ自分たちの得意なこと、できることを持ち寄って、好きなときに自分が関われる分だけ関わるといって、ゆるやかなコミュニケーションの場をつくっています。メンバーは500人近くになっていますが、それだけたくさんの方が組員となっていること自体がすごいことですし、やはり社会に参画したいという思いを持っておられる方は

たくさんいらっしゃるということが、「まちぐみ」に限らずいままでの事業の中から見えてきていますので、まだまだ八戸は大丈夫だと思っています。

それで、アートファーマーの仕組みを取り入れることを考えているのです。市民の方々、特にターナーやUターンで八戸に移住されてきた方は、八戸で何かおもしろいことがないかと探しています。これまでの例ですと、「はっち」での取り組みに興味をもって参加する方は結構いらつしやいます。

### それでも一緒に何かやるために

高森 市内の小学校、中学校、高校には、それぞれ美術部会という美術の先生方の集まりがあります。そこお話をさせていただったりしています。

東北造形教育研究大会が、令和元年度は八戸で開催されました。小学校の体育館を使っているいろいろな美術や図工の授業内容の展示をしたんですが、先生方からの依頼で、市の学芸員が展示のディレクションを担当しました。このように、学校の先生方と学芸員と一緒に活動するための準備をしてきています。

大学の場合は、組織というよりは、個々に特徴的な活動をされている先生方それぞれと一緒に活動することが多いです。

学校も忙しいので、通常の授業と別に何かをやるといのは、学校に負担がかかるのでなかなか難しいところがあります。それでも一緒に何かやるためには、少しずつ実績を積み上げていくしかないと思っています。各学校に呼びかけて、「面白いですね」と興味を持っていただけた、どこか1校とでも一緒にやれば、その活動報告会で他の先生方に写真や動画を見ていただくと、生徒さんも生き生きしているし、「こつこのなら、ぜひうちもやりたいです」と、さらに手を挙げていただけることにつながっていきます。

の一つに入るんだろうなと思ってお聞きしていました。

高森 ありますね。以前、「はっち」で行ったアートプロジェクトで招聘したアーティストが八戸の縄文文化に興味を持って、是川縄文館と一緒に何かやりたいという話になりました。最初は縄文館の学芸員はあまり乗って来なかったんですが、アーティストが中心街のビルの空きスペースの一角にラボをつくって、子どもたちと一緒に縄文生活を体験したり、そこから現代につながるものを探るというプロジェクトをわかりやすい形で展開していったら、興味を持った学芸員が、足繁くラボに来てくれるようになりました。

小林 ああ、よかった。

### 一緒に体感してもらおう

高森 だんだん「こういうのもあるよ」とか、「こんなこともできるんじゃないか」とアドバイスをもらったり、最後は、海のキャンプ場にアーティストが設えた縄文時代をイメージした村の中で、子どもたちが縄文時代の生活体験を1日泊まりでやったんですけど、そこにその学芸員も通常業務で忙しい中を、時間を割いて自ら参加してくれました。土器の標本を持って来てくれて、子どもたちに触らせてくれたりして、本人も心底楽しんでるようでした。縄文館では毎年、縄文まつりをやっているんですが、集客に苦労していると話していました。でも、「はっち」とアーティストと一緒に新しいアプローチの仕方をしてたら、「こんなに人が来るんだ」ということが見えて、すごく刺激を受けたらしいです。「はっち」のプロジェクトは1年限りでしたが、それをぜひまたやりたいということで、今度はその学芸員が主導して、違う形にはなりませんが、2年目は縄文館側で開催しました。やはり、一緒に体感してもらおうということが必要なんだと改めて実感しました。

高森 保存、展示っていうのがあるじゃないですか。それを継続しつつ、プラスチックの部分が大きくなってきたとき、そのバランスをどう取っているのかは課題として持っています。その辺はどうですか。

高森 管理運営基本計画のなかでは、調査研究や作品収集・保存などを、新美術館の活動の根底を支える基本事業に位置付けて、そこから膨らんだ、地域や市民と連携しながら実施するものをパイロット事業として、プロジェクトごとに組織横断的なチームを編成してやりますという計画にしています。例えば作品や作家の調査研究も、それを単独で進めるといよりは、プロジェクトのなかの1事業として連動させていく。パイロット事業は、設定した目的を一定期間内に達成していく期間限定のプロジェクト型の事業ですが、そのなかで学芸員、市民、専門家など様々な人が集まって、学んで、必要なことを調査研究したり、コレクションしたり、アーカイブしてというような事業の構成を想定しています。

高森 そうですね。私も大学では行政を専攻していて全然芸術文化を学んでないんですよ。でも、私に限らず、そういう人が美術館のスタッフとして入っていることによつて、文化芸術以外の経験、例えばまちづくりとか、福祉とかを見て来ているので、そういう美術とは別の専門性や、予算や法律といった行政職としての強みも美術館活動に活かせると思います。

高森 そうですね。特定分野の方としか関わってないと、狭いコミュニティになってしまうので。

高森 そうですね。特定分野の方としか関わってないと、狭いコミュニティになってしまうので。

高森 そうですね。特定分野の方としか関わってないと、狭いコミュニティになってしまうので。

高森 そうですね。特定分野の方としか関わってないと、狭いコミュニティになってしまうので。

高森 そうですね。特定分野の方としか関わってないと、狭いコミュニティになってしまうので。

高森 そうですね。特定分野の方としか関わってないと、狭いコミュニティになってしまうので。

高森 そうですね。こちらとしては、絶対いいものになると信じてやっているんで、相手方からすれば多少強引だと思われるかもしれませんが、とにかく体験してもらえさえすれば、わかっていただけるのではないかと思います。

高森 そうですね。こちらとしては、絶対いいものになると信じてやっているんで、相手方からすれば多少強引だと思われるかもしれませんが、とにかく体験してもらえさえすれば、わかっていただけるのではないかと思います。

高森 そうですね。こちらとしては、絶対いいものになると信じてやっているんで、相手方からすれば多少強引だと思われるかもしれませんが、とにかく体験してもらえさえすれば、わかっていただけるのではないかと思います。

高森 そうですね。私も大学では行政を専攻していて全然芸術文化を学んでないんですよ。でも、私に限らず、そういう人が美術館のスタッフとして入っていることによつて、文化芸術以外の経験、例えばまちづくりとか、福祉とかを見て来ているので、そういう美術とは別の専門性や、予算や法律といった行政職としての強みも美術館活動に活かせると思います。

### 「このプロジェクトに関わらなければ、私はこんな活動はしませんでした」

高森 地域の様々な課題に対して、それをいままでは違うやり方でアプローチして、違う展開をつくれなにかとずっと考えています。人の創造力とか、何か突破できるような新しい発想などを、美術館やアートに触れることによって育んで、それをそれぞれの活動のフィールドに持ち帰って、そこで発揮していただくということを考えています。その因果関係をのちに検証するのは難しいんですが、でも、そういうことが起こるものと信じて、いろいろやっています。「このプロジェクトに関わらなければ、私はこんな活動はしませんでした」という意見を聞くのがすごく嬉しくて、そういう提供ができればいいなと思っています。

### そういうことが起っていることの伝え方、残し方

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

### 美術館も社会包摂の場

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

### 高森

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

高森 もうそれは、プロジェクトが終わったあとも、参加しているという声を拾ったり、そういうことが起っていることの伝え方、残し方みたいなのは、何かされていますか。

える社会がつけられるのではないかと、というお話も伺っています。  
なかなか難しいことはあるんですけど、そういうところに美術館が寄り添えないかということも考えたいと思っています。

小林  
震災後に復興公営住宅を建てたときに、孤独死が出てしまうのではないかと問題がありました。美術館がすでにそういう活動をしていれば、それを復興公営住宅の集会議場で展開したりすることもあり得るんだろうなと、お聞きしていて思いました。

**日ごろからそういう場所であれば**

高森  
そうですね。3・11のときは、「はっち」ができて1カ月ぐらいたったんですけど、被災地に対してアートに何ができるかが課題になりました。「はっち」の場合は、ここを拠点にして岩手県北の地域にアーティストが入り、身体ほぐしのアクティビティーや、被災地で流された写真の保護と展示のプロジェクトなどの支援を行うペースというような役割を果たしました。

例えば認知症の方も美術館のジャイアントルームの中にいられる場所があるとか、不登校の子が来ていたら見守れるとか、日ごろからそういう場所であれば、何かいざというときには、そのノウハウがあるので、助けることもできるんじゃないかと思っています。本当に手探りですけど、ジャイアントルームという場所を使って、みんなの居場所づくりをまずは始めたいと思っています。

佐藤  
熊本市現代美術館にはエントランスを入ると本棚があって、展覧会を見なくてもずっといられるスペースがありました。ピアノがあつて、毎日閉館30分前にピアノボランティアの人が弾くことをしているそうです。また市の子ども支援課の子育てひろばもあつて、専門スタッフの人がいて、子どもがいられる場所をずっとつくってきか。

「いつ、美術館を開けるんですか」と聞かれたらいいです。音楽があつたり、子どもがいられる空間があつたり、そういう場が震災後に求められて、美術館で取り組んできたことの意義がはつきりした。展覧会をつくらなければならず、たくさんさんのピアノボランティアの調整も大変だったけれど、それをやっていた意味が震災が起こつて、電話がかかつてきて、開けたら実際にみんなが来てくれたことで、あらためて確認したという話を聞きました。震災を経験してわかつたことだと思えますが、  
もともともうそういう理念でできた美術館であつたことが大事だったのだと思います。

高森  
それは素晴らしいですね。

小林  
今日は本当にありがとうございました。



美術館は地域や市民と、どのような関係を切り結んでいけるのか？ 弘前と八戸の美術館の構想を伺い、考えたのは「協働」ということでした。話のなかで、この言葉は使われていなかったかもしれない。それでも何か議論の手掛かりになりそうな予感がします。なので、一旦、ここまで考えたことを、ここに記してみたいと思います。

協働とは、なぜ必要なのか？ 異なる役割や立場、技術をもつ人たちが一緒に何かをすることを協働と呼ぶならば、その成果は関わった誰もが予期しえなかったものが生まれることにあるのだと思います。誰かの思い通りに行くことならば、わざわざ協働にする必要はない。求める成果に合わせた業務を委託すればいい。協働は、未見の成果に賭けることから始まるのでしよう。

協働とは、関わった人たちに何らかの変化を起こします。誰も回答はない。まずは問いの共有から始まっていく。「異なる」人たちが集まれば、大なり小なり、これまでにはないやり方に取り組むことになり。その成果は新たな問いを獲得することなのかもしれない。それは協働の起点を更新し、(その協働の枠組みから飛び出た) 次の実践の種になっていくものなのだと思います。

協働の過程は、とても面倒です。手間も時間もかかります。互いの違いを理解し、それゆえに相手を信頼し、未知の領域を委ね合う。活動領域を明確に定めた役割分担や分業とは違う動き方なのだと思います。その作法は個々人の感覚からは大きく見える「社会」を身の丈のサイズで捉え直すことに繋がっている。そう、協働とは身近な他者とともに、小さな社会をつくる行為といえるのかもしれない。

では、協働とアートが、どう結びつくのか？ ライフミュージアムの名付け親でもある港千尋さんは「一般的な美術展が、『すでに起きたこと』として作品を観賞者という集団へ差し出すことだとすれば、アートプロジェクトは『これから起こそうとすること』へ向けて、集団的な身体をつくってゆく営みである」と書いています(注1)。

「これから起こそうとすること」は事前に誰も「起こったこと」を知り得ないことだといえます。誰も全体を把握できない。「集团的」に関わった人々が連鎖反応を起こし、生成変化する状態をいいものとする。アートプロジェクトが内包する態度は、その過程に必然的に協働を呼び込んでしまうものなのだと思います。

美術館とアートプロジェクトの性質は違う。けれども、それは対立するものではなく、いま相互浸透が必要なのだと思います。日本では数十年にわたって各地でアートプロジェクトの実践が重ねられてきました。弘前と八戸の「新しい」美術館では、そうした歴史を背景に、「従来の」美術館から拡張した機能が議論されているのだと思います。それは八戸市新美術館が掲げた「第四世代の美術館」という言

葉に象徴的でした(注2)。

新たな機能とは、私たちが「すでに起きたこと」として意義を知っているから要請されるものなのだと思います。どんな担い手が必要か。どんな技術があるのか。そこからどんな出来事が起こるのか。異なる土地の経験、過去の出来事を、いまだからこそ、相互に学び合うことができるのかもしれない。

八戸で福島県立博物館の小林めぐみさんが語った言葉が強く印象に残っています。学芸員の仕事は(地域との関わりにおいて) 非常時に必ず役に立つ。ものの来歴を調べることは地域を知ることであり、そこには人との関わりが介在する。そうして培われた技術や関係性は非常時に機能する、と。震災後の経験から実感が込もった言葉でした。

「これから起こそうとすること」は事前に説明が難しいものです。だからこそ、他者の経験を、援用することで、未見なものに向かう架け橋となる言葉をつくる必要があります。そのとき新しく語り出す言葉は、私たちが、すでに知っていることと地続きなのだと思います。

協働の現場では、目の前にいる人々との具体的な関係づくりが求められます。その場の規模は必然的に小さくならざるをえません。その場でうまれる価値に立会うことの出来る人の数は限られてしまいます。安心して関係を結ぶ場をつくるためにも、その場にはいない人に「起こったこと」を伝える手段が必要になります。それはあつたことを記述するだけでなく、伝わるかたちに描写し直す技術が求められるのだと思います。

その成果の語り手は往々にして協働を「仕掛ける」主体になります。しかし、協働の成果とは「事業」の範疇を軽々と超えていきます。関わった人々に蒔かれた種は、それぞれの日常のなかで開花していきます。「業務」の外で見えてくるものも多い。そのとき仕掛けた側が「回収」しない語り方とは、どんなものがあるのだろうか。見えるからこそ、語らねばならないともいえます。ここには語りの技術とともに倫理が関わっているのだと思います。そして、それをふたたび「仕事」の範疇に書き換えるということも。

(注1) 港千尋「創りだす手の思想と実践へ向けて」『これからの文化を「10年単位」で語るためにー東京アートポイント計画2009-2018ー』アーツカウンシル東京、2019年、85頁(初出『TARLREPORT』、2010年)。

(注2) 佐藤慎也「シリーズ：これからの美術館を考える(7)「第四世代の美術館」の可能性」ウェブ版美術手帖、2018年10月20日。